



Kuhn, Michael, (2016) How the Social Sciences Think about the World's Social – Outline of a Critique, Stuttgart ibidem

Overview

M・クーン 「社会科学はどのように世界の社会世界について考えているか：ある批判の概要」シュトゥットガルト：ibidem

要旨

200年の歴史を持つ社会科学の思考ⁱⁱ、特に批判的社会科学思考がなぜ世界をより良いものにしてこられなかったのか、という疑問に突き動かされた結果、本著において社会科学についての理論の概要を説明することにした。本著は5つの章にわけて次に挙げることについて議論を展開している。社会科学とはある特定の形式をもった思考方法であり、それは国民国家社会の出現とともに現れたというだけでなく、国民国家における社会の構成物が有している見解を通してそこにある社会世界について考えるという思考様式のひとつでもあり、様々なカテゴリー体系を通して社会世界を反映するひとつの思考方法である。これらのカテゴリーは国民国家によって作られた社会世界が有する日常の関心事を認識的に再生産するものである。そしてそれは国民国家によって作られた社会世界が社会自身につい

て有する特定の科学的知識だということである。

第1章では、社会科学が、個別の国民国家的社会世界に思考を限定し、その限定した国家社会世界がその社会で起こっている様々な現象を理解しようと仮定することによってだけでなく、かつては国家的社会のバイオトープというものを超えて理論化を行ってきたのだが、いまや国家が作り上げた構造の観点を通して理論化している。そうすることによって社会科学がいかにもその思想を構築しているかということを経典の主要な社会科学分野のいくつかの理論に沿って示す。ここでいう国家的社会のバイオトープというものは社会科学の思考を否応なく世界の中の社会世界というものについて純粋な帝國的ⁱⁱⁱ思考に向かわせ、その結果、どの国家的に構築された知識が（社会科学）思考を支配するのかという議論に発展させるのである。さらに、そのような帝國的思考に反対することは国民国家的視点に偏向した理論化の方法に対する批判にも主要な社会科学理論に対する批判にもならず、国家的に偏向した帝國的な世界での理論化活動の一極化に対して別の国家的に偏向した思考を用いて反対しているだけであるということについて議論を展開する。結果的にこの反対の立場は南の理論対「西洋の」理論というような国家的に構築された科学的存在の間での闘争であり、どの理論がグローバルなメタ理論で理論化活動を支配しているのかということについての闘争でもあり、これが帝國的思考にとってかわる方法になっているのである。本著での議論の通り、このような方法をとることにより、この空間的に別の場所で作られた理論に対する反論は社会科学思考を世界の中の社会世界についての世界的な思考方法として社会科学を一般化し、それによってついには世界の中の国家に国家の最終目標であるところの世界中の人類に仕えるという社会科学における理想を追求するように忠告する思考方法を一般化する「西洋の」理論に対する反論となるのである。さらに議論は進み、この反論は、社会世界に対する国民国家的の観点を通じた思考方法そのものを模倣しているだけでなく、国家的に偏向した思想というものを明白に主張しており、本著ではその思想を「愛国的思想」という用語で表している。これはより新しいタイプの社会科学思考で、相対的客観的知識の概念の中に残されている客観性の要素に対抗するものであり、客観性を「全世界共通の」知識とすることに反対し、多くの「地方の」知識からなる社会科学によって相対的知識の複数性にとって代わるという主張をするものである。多くの愛国的理論から構成される社会科学の世界を創造するために、社会科学の科学的本質を批判、除外し、そのため、かつて宗教的思考と区別することで社会科学が克服してきたあらゆる種類の神秘主義に社会科学は後退してしまい、社会科学思想の最新の変化として宗教的思考の復興に道を開いた近年の社会科学における議論についてもこの章では触れている。この章は、社会科学のグローバル化についての議論は、科学を世界の知識マーケットのための国家的資源にするという政治的任務と、「コスモポリタニズム」のような高貴なアイディアにむけての使命としてどの知識が思考活動を支配するのかという闘争を高貴なものにしようとする、典型的な社会科学の努力であると結論付けている。

第2章前半では社会科学思考の専門分野の構造について、後半では専門分野が社会世界に対してその特定の観点を構築してきた土台となる基幹的なカテゴリーについて取り上げる。前半では、専門分野的思想の多様性として構築されてきた社会思想の構造は人間の本質の異なる側面を正確に反映しているということではなく、国民国家によって作られた人間—つまり市民—の単なる多数の実存への分割であるということを描いている。これはあたかもこの一人の市民が実際に政治的、経済的な人生計画のもと別々の個体からできているかのようだ、ということを示唆するものである。国家によって作られた人間は、政治的に自由で平等に作られた人間で、平等な市民として彼・彼女の人生における目的を追求する自由を有し、その人生における目標を追求するために所有している経済的手段から生まれた政治的実践された抽象物（つまり政治的に自由で平等に作られた人間）によって作られた平等を有するとされるのである。この国家によって作られた人間は、ひとりの自由で平等な個人、ひとりの政治的および経済的な生き物、そしてこの国家によって作られた人間が社会世界について有するそれぞれの関心事をもつ多数の実存という様々な有り様に分割され、この社会思想の分割は彼らが上述したような別個の視点を通して社会世界を見る専門分野的思考へとつながるのである。

後半では、社会世界に対する専門分野の特定の視点の土台となるカテゴリーを構成する重要点を探し出し、人類学、文化理論、経済学、社会学、政治理論、心理学といったいずれも基本的には同様の人間の形而上学的イメージを共有する専門分野に沿って、無秩序で飼いならされておらず統治不可能な人間の脅威、この人間の本質を制御するという専門分野的視点を土台とする専門分野的思考が人間の本質の中に認める脅威を提示する。この専門分野的思考が求める人間の本質とはまさに「帰化市民」^{iv}の本質を指すものである。カテゴリーの重要点に関する議論では、この人間の本質に対する反応としての国家を見抜くために専門分野的思考が人間の中に見出すものは単に国民国家の創造物の本質である、ということを示唆する。専門分野はこの社会体系が作り上げた国民国家社会の創造物である市民を想像することでこの形而上学的イメージの人間を人間の本質であると強く主張し、人類学でいうところの「秩序化されたメカニズム」によって制御されたり、経済学的思考でいうところの「希少性」を尊重することによりその「無限性」を統制したり、社会学的思考でいうところの「社会」によって「構築され」たり、政策科学でいうところの政治的権力によって「飼いならされ」たり、心理学的思考でいうところの内在于る良心の闘いを家畜化することで自制されたりしなければ競争する個人が脅威となると考えた。社会世界について個々の専門分野が理論化をするうえである特定の方法を見出したのは、自由意思により生じる多くの脅威をどのようにして飼いならすかという、上述したような小さな差異である。社会科学において理論化過程の思考方法はいまだに順序が逆のままなのである。古典哲学とは異なり、現実世界はアイデアの具現ではない。現代の社会科学では、「真の事実」について思考し、思考するということは思考者が世界について創造した理想世界における

真実を証明することである。社会科学は現実には社会世界それ自体についてではなく、社会科学が専門分野の中での人間についての想像物から構成されたその目的、任務として社会世界に押し付けた想像上の任務と世界が適合するかどうか及びどのように適合するののかについて思考しているのである。宗教的思考がそうであるように、社会科学思考は世界に対して各専門分野の中に存在するイメージに由来し、**世界が現在本来あるべき姿であるか否か**という問いに対して思考をしているのである。これは専門分野的思考が批判的肯定的知識および理想的に飼いならした知識の両者からなるという理想主義が原因である。これらの知識は、社会体系の家畜化は人間がその本質とうまく折り合いをつけて生きていくのを手助けする手段となるかどうかを問い、社会におけるその手段が市民にそのような手助けのサービスを提供しているかどうかを批判的に観察するものである。

第3章では、前半で社会科学における知識生産の手法について、後半で目的論的思考の進歩について議論する。

前半では、世界が彼らの理想と一致するか逸脱しているかを測りつつ進展している社会科学の知識が社会思想を創造する固有の認知モードをどのように実践しているのかについて考察する。この固有の認知モードとは現実を通じて理想世界を証言するという形で世界を形成する認知技法である。ここでいう現実には社会科学が事前にその理想世界を挿入することでその現実には「実証的現実」となる。この現実には社会科学がこの認知的作業のために創造したものであり、この作られた現実の中に彼らは「真の事実」である彼らの思想を「見つける」のである。ここでは2, 3の例を挙げ、いかに社会科学思考がこの循環的な目的論的思考を実践しているかということ进行分析していく。この目的論的思考においては、思考はなぜ事象がそうであるのかを分析することではなく、彼らの描く理想世界を現実世界と大げさに比較することの実践であり、社会科学思考がその思考の対象にアプローチする際に用いる理論の仮説を通して思考を実践しているということになる。これこそが仮説となる理論を通して行われる目的論的思考である。この目的論的思考は相対的に客観的知識であり、その仮説に対して相対的である。そして、このような知識は認識論的社会科学分野においては思考活動の当然必須のものと考えられており、社会思想の本質に対してそれは高貴なものとなるのである。

さらに後半では、自然科学分野の知識における客観性を反証することを目的とした近年の社会科学分野における自然科学に関する認識論的議論が、「パラダイム・シフト」が提唱した誤った知識から正しい知識へと神秘化された過程を通じていかに矛盾しながらも証明されたか、いわゆる相対的な自然科学の知識に関する社会科学における議論が、いかに主観的社会科学の知識に関する矛盾に対して科学的社会的知識の崩壊にむけて道を開いたか、ということについて説明したい。真の知識を共有された知識と同定することによって、自然科学における誤った知識から正しい知識へと知識を進化させてきたという知識の神秘化が社会科学の認識論では相対的な自然科学分野の知識を証明し、それがさらにグローバル

化された社会科学理論における多数の国家的に偏向した理論の集合体を認識論的に正当化したのである。

第4章では、前半で真の相対的客観的知識に関する対話による知識創造について、後半でいかにこの知識が進化していくのかということについて議論したい。

社会科学がこの相対的客観的知識の矛盾を真の知識を共有された知識とするという矛盾に変えることにより解決してきたことは、相対的客観的知識の矛盾に関する大変困難な課題である、ということについてここでは議論する。また、多数の相対的な真の知識の中からのように共有された知識を創造するのかという矛盾点についても詳細に論じる。この章では、この認知された知識に関する矛盾をどのように社会科学の認識論が社会科学理論と理論の創造に導くメタ理論を区別し、その結果認知された知識の矛盾を再生産することにつながっている知識の序列という矛盾に転換するのかということも提示する。

この章の後半では、上述の認知された知識の矛盾から生じた2つの疑問について触れている。2つの疑問とは：正しい知識として他の知識と区別ができない場合、知識はどのようにして認知された知識、メタ理論になるのか？そして、誤った知識から正しい知識へと進歩しない場合、どのように認知された知識は進歩していくのか？の2点である。その答えは次の通り。メタ理論になるために、その市民に仕える国民国家の社会科学が想定している理想世界に近づくための重要な機会として、帝國的政策アジェンダの実質的な進歩に関して、ひとつの理論が再解釈をする必要がある。これは世界が実際に追求している夢として社会科学だけが明らかにすることができる神話なのである。どのように社会科学の知識が進歩するのかという問いに対する答えは最終的にはなぜ批判的社会科学思考と貧困と戦争の世界が200年にもわたる歴史の中で共存するのかという問いにも回答するものである。

第5章では、これまでに述べてきたような従来の社会科学思考を克服し、そこから先に進む方策について2, 3の考察を提示する。

i 訳者注：原文で用いられている **the social** とは **society** とは同義語ではなく、社会を構成しているすべての事物、事象のことを指していることに注意。

ii 訳者注：原文では **thinking** であるが **thought** は本文中では思想と訳しており、**thinking** については思考する行動全体を指していることに注意。

iii 訳者注：帝國的 (**imperial**) という語はひとつの大国がその他の国を支配する構図のように思われる可能性があるが、筆者の意図するところはむしろ国対国の関係のことであり、**imperialistic** ということではない。

iv 訳者注：人間の本質は市民の本質と一致しないという観点から **naturalized citizen** 「帰化市民」との語が使用されている。